



江戸いきもの彩々

平成23年度東京大学附属図書館特別展示

総合図書館貴重書展

展示資料目録

東京大学附属図書館



ごあいさつ

東京大学附属図書館では、毎年、全学で所蔵する貴重な資料を学内外の皆様にご覧いただくため特別展示を行っています。

今年度は、総合図書館で所蔵している動物と植物に関する貴重書を中心に関連資料を選び、「江戸 いきもの彩々—総合図書館貴重書展」と題して開催することといたしました。

江戸時代に出版文化が開くと、わが国では『本草綱目』の輸入を契機に本草学の研究が盛んに行われるようになり、植物、昆虫、禽獣などが図鑑としてまとめられました。今回の展示では、厳選したそれらの資料群を、植物、虫、動物、鯨の4つのカテゴリーに分けて、約50点をご紹介します。

東京大学総合図書館は、大正12年（1923年）の関東大震災で図書館の全焼、資料の焼失という甚大な被害を受けました。その後、ロックフェラー Jr.氏からの寄付金による図書館の再建に加え、国内外から数多くの資料の寄贈をいただきました。その中には、紀州徳川家の旧蔵書「南葵文庫」や博物学者田中芳男氏の旧蔵書「田中芳男文庫」など、質量ともに充実した貴重な資料が含まれています。今回、これらの寄贈文庫の中から多くを選び、また、焼失を免れた焼け残り本も一部展示できますことは、歴史を伝える図書館の使命を考えると非常に意義深いことだと思います。

記録された江戸の動植物を通して、先人たちのいきものへの熱いまなざしを感じ取っていただければ幸いです。

平成23年10月

東京大学附属図書館長
古 田 元 夫

目 次

ごあいさつ	1
はじめに	3
展示資料解説	
植物	5
虫 —虫譜と本草学研究会—	15
動物	22
鯨 —日本の古式捕鯨と図説—	30
参考文献リスト	33
展示資料リスト	35

はじめに

動物学・植物学などの生物学が研究分野として独立する近代以前は、動植物等の自然物を対象とする学問は「博物学」「本草学」とよばれていた。江戸時代の博物学・本草学は、17世紀初めに中国から輸入された『本草綱目』の多大な影響の下に長くあった。18世紀に入ると8代将軍徳川吉宗による西洋学問の導入や全国的な薬物・物産調査の実施などに刺激を受け、19世紀には学問内容が多様化し、また日本各地へ新たな広がりを見せることになる。

今回、東京大学総合図書館で所蔵する動植物関連の資料を展示するにあたって、寄贈文庫を中心に江戸時代（一部、明治時代初期）の写本、刊本を眺めることになった。貴重書の他、書庫に並べられた図書の中に、本草学に関する極めて充実した資料群が存在することに改めて驚いた次第である。展示委員会ではこれらの資料を「植物」「虫」「動物」「鯨」の4つに分類し、各担当者が一点一点に解説を付ける作業を行った。

その中で最も点数が多いのは、博物学者田中芳男（1838－1916）が所蔵していた「田中芳男文庫」の資料である。田中は日本で「博物館」をいち早く提言し、上野の動物園、植物園設立に尽力した人物である。今回の展示資料に、彼によるものと思われる添書きが随所に見られ、資料解釈の大きな助けとなった。別の資料が貼付されたり加筆された部分も珍しくない。

「田中芳男文庫」以外にも、「南葵文庫」「青洲文庫」「鷗外文庫」などから展示している。また、わずか2点ではあるが、関東大震災の火災で焼失を免れた「焼け残り本」も展示することができた。

各カテゴリー毎の展示資料点数は以下のとおりである。

① 植物	20点
② 虫	12点
③ 動物	16点
④ 鯨	3点

展示資料解説 [凡例]

*カテゴリー番号、カテゴリー内通番

*書名（ふりがな）

*著者

*刊年 冊数

*総合図書館請求記号等は【】で表示

*旧蔵者名等は[]で表示

1 植物

我が国では早くから中国の本草研究の成果を取り入れ、本草学者により薬となる植物等の研究（本草学）が行われてきた。

江戸時代には本草学の知識をもとに救荒植物の研究や園芸にまでその守備範囲を広め、幕末を迎える頃には近代植物学へと発展する基礎が築かれた。

本コーナーでは、江戸時代の本草研究から近代植物学や生薬学へと変化していく流れの中で特徴的な資料をとりあげ、紹介する。各資料の記載が、本草・園芸・救荒それぞれの視点の違いに基づいて書かれている点に注目していただきたい。

【本草研究】

江戸時代の本草研究は、中国の本草研究、特に李時珍の『本草綱目』の影響を大きく受け、植物を薬効という観点からとらえ、研究するものであった。研究対象は植物にとどまらず鉱物等様々なものが含まれているため、植物そのものを研究するのではなく、『本草綱目』等に記載された植物と日本の植物を同定し、その薬効について研究することが中心となっていた。

【園芸】

江戸時代に入り、社会の安定と繁栄を受け、17世紀後半より園芸は全盛期を迎え、独自の発展を遂げていく。植物を「見る」対象として観察し、その細かな相違から新しい品種を見出すことに心血が注がれた。水野元勝『花壇綱目』、染井の植木屋伊藤伊兵衛親子による『錦繡枕』（後に『長生花林抄』と改題）、『花壇地錦抄』『増補地錦抄』等の『地錦抄』類、松岡恕庵（怡顔齋）『梅品』『桜品』など多くの園芸書がこの時期に刊行され、朝顔や桜、梅、臯月、椿などの品種が紹介・栽培された。さらに18世紀後半より斑入り植物や矮小化された植物など異種・奇品と呼ばれる植物が珍重され、今回の展示で紹介した『草木奇品家雅見』のような奇品を集めた図譜等も刊行された。

【救荒】

江戸時代、各地で冷害や獣害等により飢饉が度々起こり、庶民生活は危機に瀕した。特に享保・天明・天保の飢饉は江戸の三大飢饉と言われ、江戸時代の記録や日記に当時の過酷な状況が記録されている。各藩では庶民を飢饉から救うため救済策を施したが、民間でも飢饉時に利用できる植物の研究が行われ、多くの救荒書が刊行された。これは、「飢饉」に備えるためのサバイバル・マニュアルとも言えるもので野生植物の中から食用になる植物を見出し、その見分け方や調理法等を記載したものである。本草学で蓄積された知識をもとに植物に「救荒植物」という新たな視点が加えられた。

1-1 江西本草綱目 52巻 (こうせいほんぞうこうもく)



李時珍著 明刊本 30冊 (欠巻第1上 第3上 第4下至 第6 第12 第13 第26 第50) 【書庫 T81 : 9】
[青洲文庫]

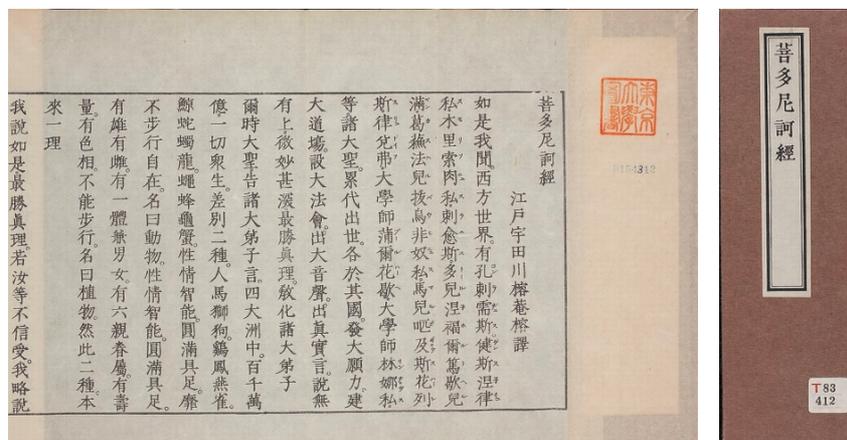
明末の医師李時珍 (1518-1593) はそれまでの本草書を集大成し、白井光太郎 (1863-1932・東京帝国大学農科大学教授) によれば「本草学上空前絶後ノ大著ト称セラル」本書

を著した。初版は1596年に刊行され、第二版は1603年に刊行された。出版地に因んで、この第二版を江西本という (展示資料には題簽に「江西」とあるが、附図の配置などから、江西本そのものではなく、江西本をベースにした石渠閣本系統のものと考えられる)。日本には早くも慶長12年 (1607) に渡来し、林羅山によって徳川家康に献本された。その後多くの和刻本が刊行され、日本の本草学は本書の影響を大きく受けながら独自の発展を遂げることとなった (2-2 参照)。

1-2 菩多尼訶経 (ぼたにかきょう)

宇田川榕菴著 昭和40 [1965] 復刻版 1冊 【書庫 T83 : 412】

『本草綱目』の影響下にあった江戸の本草学は、やがて小野蘭山の『本草綱目啓蒙』によって大成され、その後の日本の植物学、博物学、民俗学等の下地を作った (2-8 参照)。一方、江戸時代の後期に至ると、本草学の伝統と交錯しつつも、蘭学者の中から西洋の植物学を紹介する著作が現れ始める。日本で初めて西洋の植物学を概説した本書は、経本のスタイルをとった異色の書である。初版は文政5年 (1822) に刊行された。「菩多尼訶」は植物学を意味するラテン語 *botanica* に由来している。著者宇田川榕菴 (1798-1846) は蘭学者であり、25歳の若さで本書を刊行した。



1-3 植学啓原 3巻附図1巻 (しょくがくけいげん)



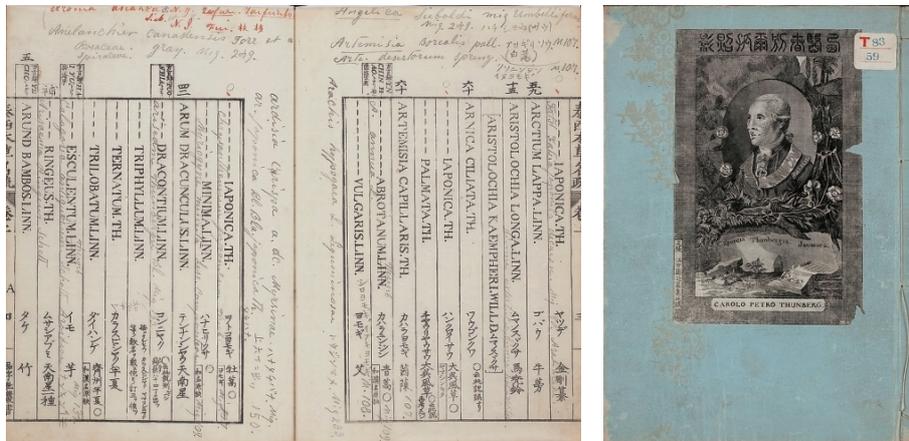
宇田川榕菴著 天保8 [1837] 刊本 標題紙に、「風雲堂藏 青藜閣」とある。1冊【書庫 T83 : 5】

『菩多尼訶經』から十余年を経て、宇田川榕菴は本書において西洋の植物学をより体系的に紹介した。明治初年においてなお、植物学の入門書として実用に耐えるものだったという。本書の初版（菩薩楼蔵版）は天保6年（1835）発行であるが、展示資料は、標題紙の記述から天保8年刊の再版の後刷り本と考えられる。

1-4 泰西本草名疏 2巻附録1巻 (たいせいほんぞうめいそ)

伊藤圭介著 文政12 [1829] 刊本 3冊 【書庫 T83 : 59】

リンネの分類体系により植物を記載・解説した日本で初めての書である。著者の伊藤圭介は名古屋の蘭医の家に生まれた。シーボルトと親交を結び、シーボルトからチュンベリー（1775年に来日したスウェーデンの植物学者）著『フロラ・ヤポニカ（日本植物誌）』を贈られた（原本が国立国会図書館の伊藤文庫に伝わっている）。この本を訳述し、和名を付したのが『泰西本草名疏』である。本書にはシーボルトから贈られたチュンベリーの肖像画が載せられている。なお、シーボルト事件に対する配慮から、本文中にシーボルトの名は伏せられ、代わりに稚膽（わかい）八郎の偽名を載せ、念入りにも「稚膽八郎ハ伊豆ノ産今死スト云」と注記がされている。事件が落ち着いた後の版ではこの注記はなくなり、「稚膽八郎」は「西醫稚氏」と改められている。



1-5 新訂草木図説草部 20巻 (しんていそうもくずせつそうぶ)



飯沼慾斎著 明治7 [1874] 刊本 20冊
【書庫 T83 : 131】 [田中芳男文庫]

日本で初めての、リンネ分類に依った近代的植物図鑑。著者の飯沼慾斎 (1782-1865) は、もともと蘭医だったが、50歳にして引退し、大垣 (岐阜県) 近郊に別荘を建てて本書の作成に専念した。慾斎は各種洋書を参照しつつも、実証的態度で研究に従事し、時には名古屋の職人に特別に作らせたという顕微鏡を用いて植物の

構造を観察した。「草部」の初版は1856年から1862年にかけて刊行されたが、刊行が終わったとき、慾斎は実に齢81に達していた。その後「木部」の刊行を予定していたが、慾斎没後長く未刊のままとなり、ようやく1977年に刊行されている。展示資料は、初版に田中芳男と小野職愨 (もとよし) が校訂を加えたもので、各図に記された学名、和名のローマ字綴りはその際に加えられたものである。

1-6 経方真図 (けいほうしんず)

服部雪斎画 明治14 [1881] 跋 1冊 【貴重書 A00 : 6521】 [鶉軒文庫]

服部雪斎 (1807-?) 自筆の薬用植物画集である。服部雪斎は、江戸時代後期から明治20年ごろにかけて、本草学、博物学に関する図譜の作成に携わり、明治に入ってから、文部省博物館に出仕して博物画の作成に従事した。展示資料は、伊藤圭介の弟子で、明治の博物館行政に大きな役割を果たした田中芳男の依頼により作成されたもので、雪斎晩年の代表的な作品とされる。



1-7 御薬苑草木写占稿（おやくえんそうもくしゃせんこう）



坂本浩雪画 文政12—天保元 [1829—1830]

1冊 【貴重書 A00:4603】 [南葵文庫]

1-8 草木写占底稿（そうもくしゃせんていこう）

坂本浩雪画 文政12—天保元 [1829—1830] 1冊 【貴重書 A00:4604】 [南葵文庫]

坂本浩雪（1800—1853）は医師・本草家であり、また写生画をよくした。ほかに、菌類56種を収録して1835年に刊行した『菌譜』や、桜の写生画である『桜譜』（1842）等の作品が残されている。展示資料はともに浩雪自筆の写生図である。

1-9 本草図譜（ほんぞうずふ）

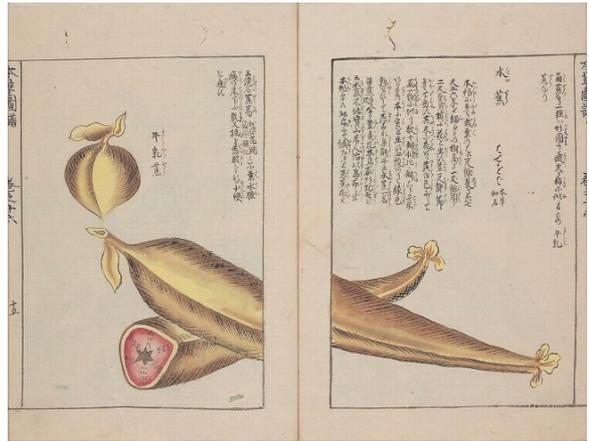
岩崎灌園著 写本 80冊 【貴重書 A00:5911】 [田中芳男文庫]

岩崎灌園（1786—1842）が写生した2,000種もの植物図に解説を添えた書で、わが国で最初の本格的な植物図鑑と言われている。植物の配列の順は、李時珍の『本草綱目』と同じになっており、『本草綱目』の図化と言えるものである。

『本草綱目』のうち日本の植物でないものは、ウェインマン（Johann W. Weinmann）の『花譜』（*Phytanthoza iconographia*）を模写している。ウェインマンが描かせた段階で、他の図版の転写であったり標本からであった図を、さらに自己流で省略化しているため、植物図としての正確さには欠ける部分がある。

『本草図譜』は文政11年（1828）に完成した自筆本96巻を、自費予約出版という形で刊行。文政13年（1830）に巻5—10を木版手彩で出版したが、その後は画工に模写させて配本を続けた。天保13年（1842）に灌園が死去し、その後は息子信正と門人小山広孝が継続し、弘化元年（1844）に配本を終えた。

所蔵本は80冊、蜂須賀家旧蔵から田中芳男の蔵書となったものが巻5—70、66冊ある。巻71より巻数が巻39—50に改まっており、この14冊は別の筆写と思われる。



1-10 草花絵前集（くさばなえぜんしゅう）



伊藤伊兵衛三之丞画、伊藤伊兵衛政武注 江戸
須原屋茂兵衛 元禄12 [1699] 刊本 3冊
印記：「田安府芸堂印」「旧和歌山徳川氏蔵」
【書庫 T83：83】 [南葵文庫]

染井の植木屋三代目伊藤伊兵衛（三之丞）が描いた図に四代目政武が注を加えた園芸書。園芸植物120品目を取りあげ、それぞれの植物の特徴をとらえた詳細な図に名前、花の形、色、開花時期等の説明が記述される。当初「後集」

を刊行する予定で題名を「前集」としているが、刊行されていない。そのため後印本では題箋の書名に「前集」の文字は使われず「全集」となっている。福寿草が文献上に現れるのはこの資料が初出との研究がある。

1-11 地錦抄（じきんしょう）

江戸染井（現在の豊島区駒込付近）の種樹家伊藤伊兵衛親子（三代、四代）によって書かれた園芸書。園芸植物の種類や栽培方法を記述する。総合園芸書として以降の園芸界に影響を与えた。伊藤家は代々伊兵衛を名乗り、江戸一番の植木屋と言われた。

1-11-1 花壇地錦抄（かだんじきんしょう）

伊藤伊兵衛（三代）三之丞著 出版事項不明 刊本（小本） 6冊 印記：「平尾図書」【書庫 T83：62】

花壇に植える草花・樹木の種類や栽培法、観賞法について解説したもの。最初に出版されたのは、元禄7年（1694）。

1-11-2 増補地錦抄（ぞうほじきんしょう）

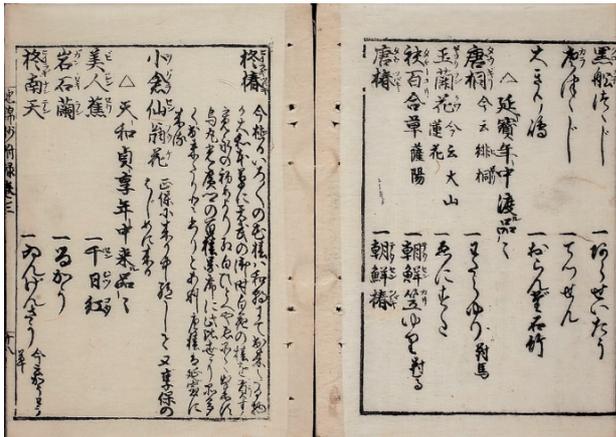
伊藤伊兵衛（四代）政武著・画 江戸 須原屋茂兵衛 宝永7 [1710] 刊本（小本） 8冊
【書庫 XA70：226】 [鶉軒文庫]

『花壇地錦抄』を増補したもの。伊藤政武自身による図がつく。

1-11-3 広益地錦抄（こうえきじきんしょう）

伊藤伊兵衛（四代）政武著・画 武江 須原屋茂兵衛 享保4 [1719] 刊本（小本） 8冊
【書庫 XA70：225】 [鶉軒文庫]

1-11-4 地錦抄附録 (じきんしょうふろく)



伊藤伊兵衛 (四代) 政武著・画 出版事項不明 刊本 (小本) 4冊 最初に出版されたのは、享保18 [1733]

【書庫 XA70:117】 [田中芳男文庫]

1-12 草木奇品家雅見 (そうもくきひんかがみ)

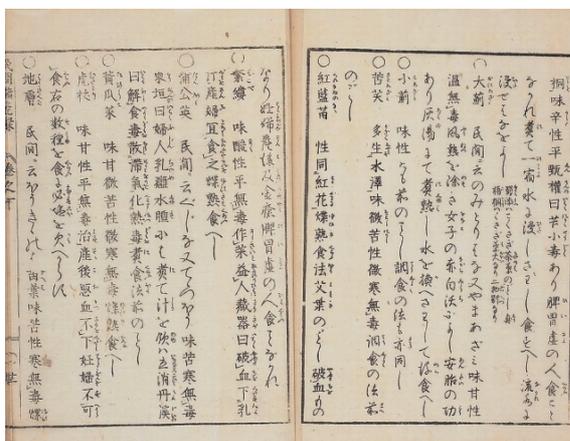


種樹家金太撰 文政10 [1827] 刊本 3冊

【貴重書 A00:4507】 [青洲文庫]

斑入りや反り返った葉、枝垂れなど植物の奇品502品を集めた図録。取り上げられている奇品のうち、斑入りのものが最も多い。各奇品には名称と来歴、作者の略歴を付す。図は、大岡雲峰、関根雲亭、石川碩峯らにより描かれる。撰者は、江戸青山の植木屋増田繁亭で、通称金太または金太郎という。同じく斑入り植物を集めた水野忠暁の『草木錦葉集』(文政12年(1829)刊)とともに奇品図録として有名。

1-13 民間備荒録 (みんかんびこうろく)



建部清庵 東都 申椒堂 明和8 [1771]

刊本 2冊 【書庫 XA20:1226】

一関藩の藩医建部清庵 (1712-1782) が奥羽地方を襲った宝暦の飢饉の惨状を目の当たりにし、飢饉への対策として宝暦5年 (1755) に著した救荒書である。最初一関藩に献上され、藩では写本を作成し、村々に配ったと言われる。最初に著作が書かれてから16年後の明和8年になって刊行されたが、日本人の手になる本格的

救荒書として以降の救荒書に大きな影響を与えた。内容は、食用とする植物の選別・解毒・調理方法や飢餓で倒れた人の救助方法などが具体的に記述されている。著者の建部清庵は、杉田玄白との間で交わされた往復書簡が後に『和蘭医事問答』として刊行されたことで知られている。杉田玄白との交流を通じ、大槻玄沢、杉田伯玄（清庵の五男で後に杉田玄白の養子となった。）など門下から蘭学者を輩出した。

1-14 備荒草木図（びこうそうもくず）

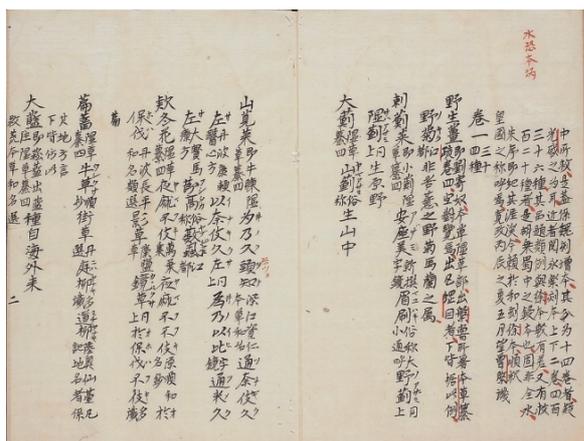


建部清庵 天真楼蔵版 天保4 [1833]
刊本 2冊 【書庫 T81 : 66】 [田中芳男文庫]

明和8年に『民間備荒録』と対になる書物として建部清庵によって草稿が書かれたが、果たせないまま世を去ったため清庵の死後、杉田玄白の次男杉田立卿により天保4年（1833）に刊行された。（明和8年刊行の『民間備荒録』の巻末には、「『備荒録草木図』一冊 未刻」と予告されている。）『民間備荒録』が理論的な書として書かれているのに対し、この書では実践の書として多くの人を読めるよう全体にわたって振り仮名がつけられている。内容は、104種の植物をとりあげ、実際の植物と見分けがつけられるよう詳細な図のもとに名称と可食部、調理方法を簡単に記述する。

して書かれているのに対し、この書では実践の書として多くの人を読めるよう全体にわたって振り仮名がつけられている。内容は、104種の植物をとりあげ、実際の植物と見分けがつけられるよう詳細な図のもとに名称と可食部、調理方法を簡単に記述する。

1-15 周定王救荒本草和名撰 14巻（しゅうていおうきゅうこうほんぞうわみょうせん）



曾湜（占春）著 嘉永4 [1851] 写 書写者 森約之養眞 1冊 印記：「森氏」（森立之旧蔵書）【貴重書 A00 : 5921】 [田中芳男文庫]

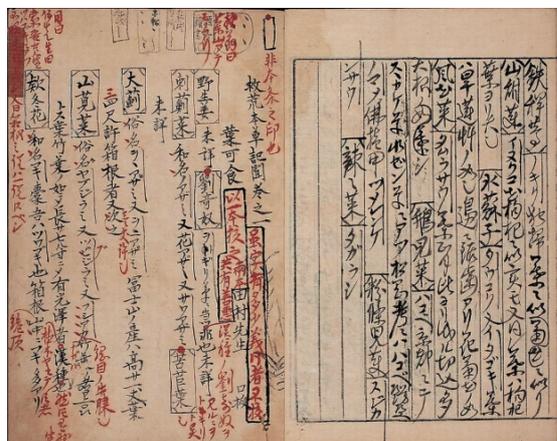
本写本のもとになった書の成立時期は、曾占春の「寛政丙辰之夏五月」序から寛政8年（1796）5月と考えられる。『救荒本草』にてくる植物の和名を解説したもの。曾湜（1758-1834）は医師・本草家。田村藍水の塾で本草学を学んだ。

『救荒本草』は、明の太祖朱元璋の第5子、周定王朱橚（しゅしゅく）（1425没）撰で、1406年に刊行された。わが国では、松岡玄達が明の徐光啓が編集した『農政全書』の中にあるのを発見し、わが国でも役に立つものとして抜き出し、享保1年（1716）和刻した。その後様々な版が刊行され、わが国の救荒書に大きな影響を及ぼすこととなった。

書写した森約之は、森立之の長男として江戸の福山藩邸に生まれた。医号は養眞。学問を父森

立之に学び、躋寿館の聴聞にも列席し、後に『本草経』を講義した。父森立之の手写事業を手伝い、森約之の手になる写本が残る。最後に福山に移り、福山藩の藩校である誠之館の講師となった。

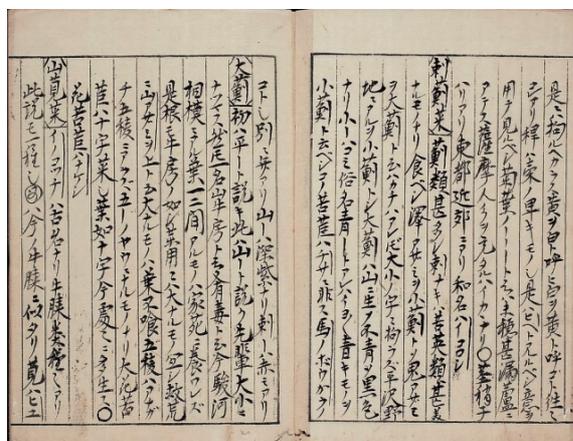
1-16 救荒本草紀聞 17巻 (きゅうこうほんぞうきぶん)



田村元雄 (藍水) 述 嘉永7 [1854] 写 書写者は森約之の父 (森立之) 1冊 印記: 「森氏」(森立之旧蔵書) 【貴重書 A00:5915】
[田中芳男文庫]

『救荒野譜紀聞』と合綴。田村藍水の講義録を写したもののか。書写した森立之は、文化4年(1807)江戸に生まれる。号は枳園。福山藩の藩医で考証学者、伊澤蘭軒に医学を学ぶ。後に幕府医学館講師となり、『医心方』の校刻事業にも参加したが、その他の逸書の復元にも功績をなした。

1-17 救荒本草記聞 14巻 (きゅうこうほんぞうきぶん)



岩 (岩永) 澄元著 嘉永2 [1849] 写 書写者は森約之 1冊 印記: 「森氏」(森立之旧蔵書) 附救荒野譜 【貴重書 A00:5916】 [田中芳男文庫]

岩澄元 (1721-1795) は、岩永玄浩の子で太田澄元といった。本草家で後に医学館・躋寿館で教えた。